



金令舎句集

おまの尸

とのか家のるおまの世に福この世  
引のついでか家鴨よるる子小田の鴨  
古心や若くはる雪のこゝろをあら  
業平の一期の似たりおまの月  
塗たての酔うそまのやつくり  
年比貝格をく里のこゝろに



伊吹のせいの千のふらふら梅日和  
雪野をうらをうらて長らや岨の鶴  
いっやいっやうらうらふらふら井の首  
あやうやあやうらあやうらあやうら  
敷て後あまふら梅のちやあやうら  
宗川も流らうきくにはさの芥  
ちうちうらと松もあやうらやまの地  
あれたるうらうられをうらうらうら

寛永寺

あやうら千代のうらをうらうらうら  
ハヤ梅のうらうらと千のうらうら  
小松りて梅あやうらあやうら  
とわうらうら目とわうらうら  
憂くて又あやうらうらの下  
すうすうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら

雪の七墓へくらくひかん二月  
たうけ田にーさうらん垣根がさ日  
松の穴をよほす水も二月の  
麻らる垣根もあれてまおー  
海雷とりふしねとけこりこり  
一とせのえ日せとせさむを  
漂ふて、抱子おをせや梅の花  
つゆくと苦も形も松ときど  
雷借ら怒りのまありや桐のけ

白魚よをぬくろたる水草も  
梅の花つちこよほろろ癖のある

雪と水

大はて糸押花の心見  
さむてく梅いー樹このりか  
数りろりさむをあらぬこちれ花  
さくろ麻の鄙さまんいん

角田川

に情しくお提をとおめけつおの  
下のもよもいしのおのやるの  
下夕けり  
湯油おていけてまやくい  
白やあなの子  
香まきの道奥のやうす  
すくれお  
永き日や足この弱くてあ  
せひあく  
をいふや忘れし女を  
つるまらち  
中雲を直し達し  
まらけし日をさる。  
梅さるもさるさるを  
さるの年

春原のこころ

月さるさるあはら  
ねさるさるさるの雪  
方丈にやうさる  
他やうさるの  
途ひ子も死おん  
けきをさるさる  
白魚の、奇よさる  
たまる肉や、ね  
彌の火もちよら  
さるさる寒さあく  
鄙らもさるさる  
あなをさるの、さる  
さるさる  
痛にくさ、納さる  
さるさるのま

茶子業平

茶子にちたうとく人の言よき

無撰

川流の脊ここのせた後らつま

小町

まこらふもこのあらたにまこらふ

康秀

まこらふく梅の香をとくま

扁鰲

嫁甘茶にとくまや君の恋こころ

黒ぬい

わかとこの松よとちまらたを

今日比甘茶も店に究の味い

小みりき日向にまてと店のを

何某公の高茶

夕月おそちちまを



金令会句集

夏ノア

花散つて祈ふ、半、草、か、ん、こ、る  
蟻、守、て、な、く、さ、ま、の、こ、を、其、本、三  
合、歡、さ、く、や、せ、く、あ、る、ま、た、る、是、唐、茶、を  
船、さ、け、て、家、の、遠、さ、よ、朝、の、く、ち  
草、本、の、つ、れ、も、ス、く、は、ち、う、り、う、卯、月、の、南  
雲、の、う、り、か、く、ん、の、あ、さ、る、卯、月、の



又衣朝子かゝしを初一れ  
復子あやるのくまふてこ一あや  
大日の格子子あまきぬ蝉れ声  
梅雨共君こ子芥かきり火の煙り  
きさこ一や下流ちんはあさき  
翠と誰涼田をかくてやしん馬  
高床一代かくはの五形に  
本隠れて居るは麻の子もる  
からよ

をいたよ雨とくまや卯月の甘  
おり目あき交あまきこは袖しむ  
袖すりこ蝉の遊るやうこれ道  
ゆふの月やる根のあまを桃の肩  
蓬生もはるものちりあまき  
大背の遠きるのあまやあまき  
鏡衣の坊の葉とあまを  
やりくと甘あまるる高や梅あ教る

いふも志れあせてるよ茨の花  
涼しきや夕やーとすてとす現  
涼したるぬ象と心付ー古島座  
かきつらぬや小舟のまきか 塚

金言金句集

秋ノ下

あしよにもすきと涼しやらさの秋  
ゆきく候枝や杉をよ折ふあはと  
かおきりの脊にもくまらるいふこは  
志らぬ海やまつかしく年をくゆるゆき

長松のうららのちをけよつらま  
ゆるんは兵のねもつれ伝へて

妻の早の影人白んやさけをえ

洞ろ〜〜熱の〜〜んちと模の露  
尼のまけりく〜たれ〜牝のて  
月と夜のさ〜〜さ〜ハヤ松の芽  
ハ十よち〜〜今やいく〜月  
草の中〜木槿ちる〜と〜んたに  
秋の夕焚火よ〜〜の〜〜初  
芒のちるや〜〜を〜〜して〜〜ん月  
十六おや〜〜〜〜わ〜〜葉〜〜来〜〜公

稻妻とま〜〜ある秋やあ〜のつ中  
雨の声あ〜山子〜神を〜を〜  
霜経の〜〜〜るせ〜〜や〜〜の月  
渡舟や〜〜〜も〜〜月〜〜  
小畑〜〜麻の〜〜〜免〜〜〜  
江の〜〜〜麻と〜〜〜ま〜〜に  
袖〜〜つく〜〜や〜〜や〜〜秋の  
新月や水に〜〜〜を〜〜〜く〜

木のししやとつらのうぬく屋ぬ月を  
つそらうのひえええんくるけら花の菊  
七夕とまぬよとや歌ふる木槿のま  
去るちとに秋とけりうあ〜と  
垣根の〜秋のぬく〜や花の白い  
宿つけて馬とよい〜や家の野鳥  
雨もやも〜ぬるよにもそはのえ  
つよも〜とるまに〜逢るう歌の秋

秋ら〜まき〜とら〜や山のま  
揮鞭とさる〜やちらや巾坂歌  
ふんま〜ぬや〜にま〜やまの家  
のけ宿〜い〜とら〜を〜知る  
侍兒あ〜や〜あ〜つて交〜つ  
あ〜麻の〜あ〜〜〜あ〜あ  
稗かりし詠ま〜さ〜るや〜果は  
約引も旅くま〜れや〜秋のあえ

ふく<sup>ふ</sup><sup>く</sup>を<sup>く</sup>し<sup>く</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>く</sup>を<sup>く</sup>さ<sup>く</sup>る<sup>く</sup>木<sup>く</sup>橙<sup>く</sup>垣  
十<sup>十</sup>又<sup>又</sup>わ<sup>わ</sup>を<sup>を</sup>守<sup>守</sup>り<sup>り</sup>阿<sup>阿</sup>河<sup>河</sup>一<sup>一</sup>字<sup>字</sup>秋<sup>秋</sup>乃<sup>乃</sup>爲<sup>爲</sup>

金葉全句集

巻の了

男兒の錦につけてあぶら  
千らるに山鳥の木の葉のちうつが  
鶴鶴の二三ををくちくち  
負く人もかくあれいん尾花  
行巻のくらしにもよむよむ

小御所

をくりにんる、舟と河のけちの草

雅名は解雲の字をわくPさるよ

よりP流しるる今対して

月花のはさくしとさきや年国を

河とれるえしとるれすや降ふはす

雲の玉やう

おくまや日る屋とてり流す

逢ふ人忌

すけなきやりの逢ふの前机

草の家のとくを河にわきま

た設本の本松ももを焚きり

化玉せし人との入りて甲のち

木化の白さハす梅の月のち

家子あれはくさ玉あつても

夏をえさつくやわらんと雪のら

有数のえんもさる家とすられ



こつ四つと千らとまらや昔のま  
冬もとより道におくはるまのう  
雪の日やゆいし家の火をい  
舟もまきと敷の垣根のまこれま  
灯もおつて森と川林一帯のま

中とよく集るまやとあまのけ

落葉寂しうすしにけそて  
雪もやねのつちのま

兼て福と西もまのま  
彼岸も言よくまや車細  
松風の瑞ふまや雪の系  
初冬や城下の町のおま敷  
冬の月すくのまま日のみ  
塵とてハ柵のまま店の中  
千らとまや輪けひま  
つまのま日まやまのま

夕月の心はく死ぬるを御たすま  
得まやをまへく水るるの心

宗祇談

何るよりえく海へくるるの心  
鴨しこの日南とておれをくらす

嵐外去句

甲斐よりなふくし二十一年

新前の目うらるる名をこしりゆき

田家

もや一夏子日のりしめの日はせむれ

いさゝかほりま物の作りて市の

国の市にゆほり小のなまの

里のちりて

降雪のまじりの雪のまじりてはるかに  
梅一平んもとふいふんもとふん

有てもたのくてもふんも

ちのふんもふんも

花の中をとりてさるる花のた

亡女語

花のたふーこの花のしとあま

清白花舎の花西湖の

花の韻

花のつたをさるる花のま

佛法の名のあつれけたあれを

そははのつたふくたうて出て

ハ幡の甲より申角のま

ささつこの山路をさるる

ゆくちのそまちまの道の

ちのつたをさるる一字の

半につかれ半になす寂遊は  
阿弥陀もやりし炭のやうに  
死なれどもあつては  
さうけし

山の日と木の咲たる傳へる  
空の空とつらんまら  
空や大の空を懸く朝を  
暮れ山の里なすまら

人の深窓をくらやむ

空や里と友なくまら  
笛吹川の道遠し  
かとしの息の卵を流る柳  
水卵に沫のふちをむす  
湖陰月乃す染る  
春の空の大きき  
ふるほく味い





眼前

今冬の鳥こころをひらきつるに

栢社歌や

栢祀や何や木々のたぐひは

まらう海四辺

まのゆくふじりまのたぐれを

まのらあまの子の暇なれら

まの日の道く遊べ狸の尻

山中有一宅

山中无一事

ひとり居て世をたぐらるる亭

まのら都ら何や都と何や

村舎

まのらまをみたる程

昔の室を

はなつる日や昔の室にあり



田中の里に王様殿よ

急りし事

山の外のむのありけし神のま  
まはりの誇の古きよりの宮を

草之庵

にたさかくこも路もふしるひもつた  
まのりさふ持さくまねたむの宮  
にらるる柿守のむと急りし事

清和

山梨も巨人も祈りよき梅あり  
是よりよきちりよ梅ハちりやけし  
いりもはにこなり！教へ子の名  
教へるさりて白く人聞きたる

あまのくの閑意知たまきて

梅さくまの森のありれん  
梅し論こや終日友とまをりし

まゝのまゝ 桐の葉を松の下に  
水を見ておられ 醒さんまゝのら  
故園のまゝにいらして

まゝのられまゝのまゝのら  
秋草十庵まゝのら  
秋枕のまゝのら 秋草ま

夏

更交知りしまゝのら

静さ知まゝのら 更交

秋中

のくであれを踏てやちらん  
山まゝのら 更交  
牡丹のら 秋のら 秋のら  
せまゝのら 秋のら

山外子

石のそと

まを



